「大きな物語」の「夢」と希望が瓦解した世界で…。

能勢伊勢雄（Live House PEPPERLAND）

われわれはいつから「大きな物語」を見失ってしまったのか、戦前は太平洋戦争があり、戦後は安保闘争があり、高度成長政策の夢を追いそして、全共闘運動では世界同時革命を夢見てきた。これらの時代には多くの人間が共有できる「夢」があった。しかし現在ではコロナ･パンデミックに立ち向かう日々しか無い。今、思うとこれらの夢は全て幻だったのだろうか??「大きな物語」を失うと同時に社会が共有できる「夢」も消滅した。この現状に最も突き刺さる音楽が彼女の音楽である。

Juri Suzue は美術を志向した時期を経て、白塗り舞踏ダンサーに転身し、現在は DJ.になっている。彼女の住む関西圏でいえば、大阪には維新派があるが、むしろ、白塗り舞踏では大駱駝館･山海塾に影響を受けたのかもしれない…。アルバム･タイトル『Rotten Miso』（腐った味噌）からは暗黒舞踏のエグさを感じ取れるのは偶然では無いだろう。

資本と消費の論理が先行し、物語や理念が失われた時代に表現の未来はあるのか?? このような漠然とした問が頭を持ち上げ始めた 2020 年、パンデミックによってこれまでの「ハイパー資本主義の欲望」は見事に打ち砕かれた。政府が助成金という名称で「破滅的な蕩尽」を繰り返す中で、パンデミックによって内破された「夢」が霧散した結果、私たちは、ディストピアの現実へと転落を余儀なくされる。この「大きな物語」の「夢」と希望が瓦解した世界で音楽がどのように向かい合えばよいのか?? この問題に一筋の可能性を見せてくれたのが Juri Suzue『Rotten Miso』であった。

一般的に DJ.は予めセットリストとしてシーケンスを用意するものだが、Juri Suzue はこのシーケンス自体を解体し再構築しようとする特異なアプローチを行う。どのシーケンスを DJ.が選び取ろうとも音楽に染み込んだ過去の「夢」や気分が伴ってくることに気づき、シーケンスにまとわり付いた「音楽の垢＝夢」を解体することに挑戦した。徹底的に微分化し脱構築する展開の中に我々が曝されている現実が見えはじめる。まさにディストピアの現実に向かうことを引き受けた先に見えてきた「新たな語り口」の方法である。この意味でカットアップやミクスチャー、マッシュアップとも異なり、誰も手を付けなかった領域に Juri Suzue は挑戦している。その先はどこに向かうかは誰も判断できないが、音楽はこれで良い!! 音楽は次の時代霊に呼応した予感を、最も早く私達に伝えてきたメディアであるからだ。阿木譲が晩年語った 3.11、9.11 以降の音楽に現れ始めた「ポスト終末論的実在意識(Post-apocalyptic Entity Consciousness)」をまさに実践する良質のトラックだと言える。